
かけっこが得意なアリさん

s a g i t t a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

かけっこが得意なアリさん

【コード】

N5514A

【作者名】

Sagitt a

【あらすじ】

かけっこが得意なアリさんは、草原の果てまで走っていきこうと思
います。途中で色々なものに出会って。

かけっこが得意なアリさん（前書き）

大人も楽しめる童話を目指しました。

連載作品ですが、一話だけでも成立しています。

かけっこが得意なアリさん

かけっこが得意なアリさん

ある都会の住宅街の真ん中の小さな一軒家の、猫の額ほどの小さな庭。

そこに、とつてもかけっこが得意なアリさんがいました。

仲間の中には誰一人、彼とかけっこをして勝てる者はおりませんでした。

仲間たちは彼を羨ましがって口々に言います。

「君はいいなあ。そんなに速くかけることができたら、きっと、とても遠くまでいけるだろうに。この広い草原のずっとずっと向こうまで見に行くことができるのだろうなあ」

みんなに褒められて、アリさんは得意になって言いました。

「へへっ、思いつきり走ったら、草原の果てまで行けるかもしれないな」

その言葉を聞いて、仲間のアリたちは大喜びで触角を鳴らしました。

「行ってみてよ、草原の果てに。それで、果てがどうだったか、僕たちに教えておくれよ」

アリさんは、嬉しくなって大きくうなずいて、すぐに走り出しました。惚れ惚れするような、力強い走りでした。仲間のアリたちは、六本の足を踏み鳴らしてアリさんを送り出しました。

背の高い草の間をくぐり抜け快調に走るアリさんは、みるみるうちに草原の奥に入っていました。アリさんはそれまで、自分の巢の周りの狭い範囲しか行ったことはありませんでしたから、こんな奥までやってきたのは初めてでした。

はじめて来た草原の奥には、小さな赤い実をつけた細長い草や、アリさんたちの仲間とは少し違う、赤い肌をした小さなアリや、その他、見たこともないものがたくさんありました。

「わあ、こんなにすごい景色を見ることが出来るなんて、僕は本当に、足が速くてよかったなあ」

うれしくなったアリさんは、そのまま、ずっと走り続けました。何日も何日も、走り続けました。どんどんと草原の奥に入っていて、見たこともない風景を見るのが、楽しくて仕方ありませんでした。

どれほど走ったでしょうか。ずっと走っていてさすがに少し疲れたアリさんは、ちょっと休憩しようと思って、手近な葉っぱの下に腰を下ろしました。

ふうと息を吐いたアリさんが、細長い葉っぱの先に付いた雫がきらきらと輝くのなどを眺めていますと、ぴよんと視線をさえぎる影がありました。葉っぱと見間違えてしまいそうな、緑色の肌に細長いからだ。それにぴんと伸びた長い足。アリさんは見たことがあります。それはバツタが、それはバツタでした。バツタのうちでもうんと足の速い精霊バツタが、お昼ごはんを求めて、やってきたのでした。

「やあやあ、アリさん。この辺じゃ見かけない顔だけど、どこから来たんだい？」

細長い顔のバツタが、人懐こそうにアリさんに話しかけてきました。

「これはこれははじめまして。僕はずっと遠くから、ここまで来ました。僕は足が速いから、みんなが行くことができない遠くまで、こうして走ってきたんですよ」

アリさんは、誇らしげに言いました。それを聞いたバツタが、おかしそうに触角を震わせてクスクスと笑います。

「遠くって？ いったいどれほど遠くなんだい？ 君が元いたところはどんなところか、教えちゃくれないかね？」

アリさんは、バツタがなぜそんなふうにあつているのか検討もつかなくて、首をかしげながら答えました。

「僕が来たのはうんと遠くだから、きっとあなたは知らないでしょうよ」

アリさんがそう言うと、バッタは今度はからだじゅうを震わせて笑いました。

「あつはつは。いいからどんなところか、教えておくれよ」

相変わらずバッタが笑っているわけは分かりませんでした。気のいいアリさんは、自分のいたところがどんなところか、バッタに教えてあげることになりました。

「僕が来たところはね、タンポポがたくさん生えているんです。タンポポといっても、あなたは見たことがないでしょうから、わからないかな。タンポポってのは、黄色くておしゃべりな、恥ずかしがり屋の花のことです。今の時期なんかは、黄色い大きな花が、こそそとお喋りしながら揺れていて、とっても楽しいんですよ」

アリさんは得意げに話しました。バッタは、それを聞いて、ギイギイと、大きな声を立てて、笑いこぼしました。さすがの気のいいアリさんも、ちょつと気分が悪くなるような笑い方でした。

「あなたは、どうしてそんな風に笑っているのですか？」
少しだけむっとした口調でアリさんがたずねると、バッタは、全身を震わせながらこう言いました。

「そのタンポポは、オイラの今日の朝ごはんだったよ」

バッタは、その長い足でぴょんぴょんと大きく跳び、アリさんが何日もかけてたどり着いた道のりを、ほんの数時間で行って帰ってきてしまったのでした。

今まで自分の足の速さを誇らしく思っていたアリさんは、急に恥ずかしくなつてうつむきました。

「で？ アリさんはこれからどこへ行くつもりなんだい？」

バッタは相変わらず笑いながら、がっかりしているアリさんに尋ねます。

「この草原の果てまで、行ってこようと思っていたんですけど」

すっかり元気をなくしてしまったアリさんは、ため息をつきながら言いました。バッタがそれを聞いて、さもおかしそうに身体を震わせます。

「草原の果て！ やめておきなよ、アリさん。オイラは何度も草原の果てまで行っているけれど、あそこには何にもありやしないよ。ただこのことと同じような風景が広がっているだけさ」

「ご忠告ありがとう。もう一度どうするか、考えてみますよ」
元気のない声でアリさんが応えると、バツタは満足したように、ぴよん、と地面を蹴って去っていきました。

なんて惚れ惚れするような、大きな大きなジャンプなんだろう。あれに比べたら、僕の足の速さなんてちっぽけなものにすぎないなあ。アリさんはそう思って、ふうとため息をつきました。

「これからどうしようかな」

途方に暮れたアリさんが、ぼつりと呟きました。

「さっきの彼が言っていたみたいに、草原の果てに行ったところで、何にもないのかな」

薄緑色の、細長い葉っぱの下に腰を下ろしたまま、アリさんは一人で考えつづけます。

「このまま帰っちゃったほうが、いいのかな」

「アリさんアリさん、何を悩んでいるんだい？」

不意に、アリさんの足元で声が聞こえました。それはちっちゃな、気を抜くと聞き漏らしてしまいそうな風のような声でした。

声の主は小さなアリさんよりももっと小さな、透きとおった緑色の肌のアオムシでした。

アオムシは、アリさんの足元で、その小さな身体をいっぱい動かしてちよつとずつちよつとずつ歩いていました。

「ねえアリさん。何を悩んでいるの？」

ゆっくりゆっくり一生懸命歩きながら、アオムシはアリさんにもう一度尋ねました。

「こんにちは、アオムシさん。あのね、僕は草原の果てまで行くこと思っていたんです」

「草原の果て！」

アオムシはびっくりして身体を伸びたり縮んだりさせました。

「それはそれは遠くまで行くんだねえ。そうしたら、見たこともない風景が、うんと広がっているんだろっねえ」

アオムシが言うと、アリさんは悲しそうに首を横に振りました。

「僕もそう思ってたんです。でもバツタさんが言うには、草原の果てまで行っただって、何にもありやしないって」

「何にもありやしないだって？ そんなことあるもんかい！」

アオムシは、とんでもない、とばかりに細長い身体を震わせました。

「そんなに遠くまで行ったらば、さぞや新しい発見がたくさんあるに違いないさ」

そういいながらもアオムシは、ゆっくりゆっくり一生懸命歩いています。アリさんも立ち上がって、アオムシの速度に合わせるようにゆっくりと歩き始めました。

「アオムシさんは、どこへ行くんです？」

アリさんが尋ねると、アオムシは待つてましたとばかりに得意げに体を伸ばしました。

「私もね、草原の果てまで行くつもりなんだよ」

「アオムシさんも？」

その言葉にアリさんは、びっくり仰天してしまいました。

だってアオムシはお世辞にも歩くのが早くありません。さっきからずっと頑張つて体を動かしているけれど、進んだのはほんのちよつとだけ。これでは草原の果てに着くまでに、いったいどれだけ途方もない時間がかかるでしょうか。

「あっ！」

急に、アオムシが立ち止まって大きな声を出しました。いや、アオムシの声はともちっちゃな、風のような声でしたから、大きな声と言っただってせいぜい、急に吹いた突風の音くらいの大きさです。でも、とにかく彼にしては大きな声を出して、アオムシは立ち止まったのでした。

「どうしたんです？」

アリさんが首をかしげてアオムシに尋ねました。

「ほら！ ほら！ アリさん、私はまた、新しい発見をしたよ！」
興奮した声に、アリさんは身を乗り出してアオムシが指差す方を覗き込みました。

けれどそこにあつたのは、何の変哲もない、まるい葉っぱをつけたクローバーでした。

「アオムシさん、残念だけど、これは新しい発見ではありませんよ。この葉っぱならこの辺りにはいくらでもあります。ほら、あっちにも」

「そうじゃないよ」

顔を上げて周りを見回したアリさんの声をさえぎって、アオムシは目の前のクローバーをいとおしそうに見つめています。

「え？」

「ほら、よく見てごらんよ。このクローバーはね……」

アオムシの言葉に誘われて、アリさんはもう一度、足元のクローバーを覗き込みました。

「あ、本当だ」

「ね？」

納得したふうな顔になったアリさんに、アオムシが満足そうに微笑みました。

「このクローバー、葉っぱが4枚あるんだよ」

「僕、全然気がつきませんでした」

「ゆっくり歩いていないと、気がつかないものもあるんだ」

アオムシがちよっと誇らしげに、透きとおった緑の体を伸ばして、アリさんに笑いかけました。

「さあ、アリさん。一緒に、草原の果てまで行ってみませんか？」

アリさんは胸を張って、大きく頷きました。

「ええ、もちろんですとも！」

雨の草原で

草原の果てを目指すアリさんとアオムシは、今日も歩き続けていました。アオムシの歩く速さに合わせて、ゆっくりとふたりは進んでいきます。

時折、背の高い草にまぎれてそっと咲く小さな花や、風にゆらゆらと揺れる、丸くて青い草の実や、でこぼこな土の上をせわしなく駆けては何かに驚いてまん丸になっているダンゴムシを見つけては、ゆったりとそれを眺めたりするもんですからなかなか先に進みません。

けれども、それでもふたりは少しずつですが確実に、前に向かって進んでいたのです。

ある日、草原に雨が降りました。きらきらと透き通った水のしずくが茶色い地面や背の高いまつすぐな草なんかにはぶつかっては弾け、小さなかけらをあたりに飛び散らせている、激しい雨でした。

激しい雨の中でも、アリさんとアオムシは休むことなく歩き続けていました。草原の中で育ったふたりにとって、雨はともだちなのでした。冷たい天然のシャワーが二人のからだを優しく伝い、洗い流していました。気持ちよさそうに目を細めてそれを受け止めながら、ふたりは歩いていきました。

「雨が降ると、一度見た景色もまた新しい景色になりますね」

アリさんが微笑みながら言うと、アオムシはからだを伸び縮みさせてうなずきました。

「そうだね。ほら、この黄色い花なんて、雨のしずくできらきらと輝いて、まるで宝石のようだよ」

「あ、本当ですね。僕はね、雨の日が大好きなんです。みんなが優しい水のしずくで、きらきら、きらきらと、喜んでいる気がするんです」

そんなことを言いながら、二人がさらに歩いていきますと、やが

てゴウゴウといつかすかな音が聞こえてきました。

「あっ、アオムシさん。あそこのところ、川みたいになっていますよ」

そう言ってアリさんが、道の先を指差しました。アオムシも、その透き通った緑のからだをいっぱい伸ばして道の先に目を凝らします。

アリさんの言ったとおり、道の先は降り注ぐ大粒の雨のために、茶色く濁った水がゴウゴウと音を立てて流れる川のようになっていました。

「大変だ！ あれでは先に進めませんよ」

アリさんが、あわてたように言いました。

雨によってできた川は、とてもとても小さなものでしたが、アリさんやアオムシにとってはじゅうぶん大きく、また流れも速いものでしたので、とても渡ることはできなそうでした。

「あれ、川のところには誰がいるよ」
アオムシが、がっかりしてうなだれているアリさんに声をかけました。

その言葉に、アリさんがゆっくりと顔を上げます。

川のほとりでしゃがみこんでいたのは、前にアリさんが出会った、精霊バツタでした。

「やあ、アリさんじゃないか。それにアオムシさんも」

二人に気づいたバツタが、親しげに声をかけてきました。

「これはこれはバツタさん。こんなところで何をしているんです？」「いや、草原の向こうまで昼ごはんを食べに行こうと思っていただけだね。でもこんなになっているんじゃない、いくらオイラでも渡れないやと思ってね」

バツタが、ひよいと肩をすくめてみせます。その言葉に、アリさんがさらにがっかりした顔になりました。

「バツタさんでも無理なんですか……」

「うん。だから、今日は諦めて帰ることにするよ。君たちも諦めた

ほうがいいと思うよ。」

そう言いながらバツタは、ぴよん、と地面を蹴って去っていきました。相変わらず、素晴らしい跳びっぷりでした。

去っていくバツタの姿を見送ったアリさんは、ゴウゴウと音を立てるコーヒー牛乳のような色の川を見つめてふう、とため息をつきました。

「僕たちでは、この川を渡ることはできませんよねえ」

「じゃあ、待っていていようよ」

力のない声でつぶやいたアリさんに、アオムシが普段と変わらぬい、明るい小さな声で言います。

「待っている？ 何をです？」

不思議そうな顔で聞き返したアリさんに、アオムシが嬉しそうに体を震わせて答えました。

「雨がやむのを、だよ」

それを聞いたアリさんが、灰色の空を見上げました。分厚く重なった重そうな雲からは、水色の雨のしずくがとめどなく流れ落ちてきています。

「やみそうには、ありませんよ？」

不安そうなアリさんを慰めるように、その透き通った緑の体をゆっくりと横に振って、アオムシは風のようなかなかな声で優しく言いました。

「そんなことはないさ。やまない雨なんて、ないんだよ」

ふたりは、川のほとりに腰をかけて、ゆっくりと雨がやむのを待ち続けることにしました。

待つことを決めた二人には、時間はたっぷりとあります。今までゆっくりとは言え歩き続けていましたから、こうして腰をかけてじっくりとあたりを見渡す機会はありませんでした。

立ち止まってふとあたりを眺めてみると、今まで見えなかった細かなことまで見えてくるのです。

雨のしずくが川に飛び込むときにできる小さな輪っかの数が、ちよつとずつ違うこと。

細長い緑の葉っぱが雨のしずくを受け止め、それがだんだんと葉っぱの先に集まって、ぼちゃん、と澄んだ音を立てて川に落ちるこ
と。

じつとりと濡れた青い小さな花が優しい風に吹かれて身を震わせると、細かくなった水の粒をまわりに飛び散らせ、それが静かに煙になって空に昇っていくこと。

そんなことは、ゆっくりと腰を下ろしてじつくりと周りを見渡さないで見えないものでした。

長い長い時間が経ちました。

二人は飽きることもなく、雨に濡れた花や地面や川を見渡してははしゃいだ声を上げています。

ふと、アリさんが空を見上げました。

「あ、雨がやんでいますよ！」

いつの間にか、分厚い雲は薄くなり、降り続けていた雨はやんでいました。

「ね、やまない雨はないでしょ？」

得意そうに、アオムシが言います。

雨でできた小さな川はまだ残っていました。流れが緩やかになつてゴウゴウという音もなくなり、水の量もだんだんと少なくなつていくのがわかりました。

空もだんだんと明るくなっていきました。薄い雲の隙間から、柔らかなで暖かい午後の日差しが、静かに顔を出します。

「あ、ねえ、見てごらんよ」

アオムシが体を伸ばして、空を見上げながら言いました。

「どうしたんですか？」

「虹が、出ているよ」

嬉しそうなアオムシの言葉に、アリさんも空を見上げました。

かけっこが得意なアリさん

七色の虹が、うす明るくなった空のキャンバスに架かっています。
それはとてもとても美しく、まるで神様がふたりにくれた、素
敵なプレゼントのようでした。

草原の果てに

やまない雨がないように、沈まない太陽がないように、終わらない旅はありません。

ゆつくりのんびりと行くアリさんとアオムシの旅にも、やがて終わりが見えてきました。

草原の果ては、唐突に目の前に現れました。

絡み合う草のトンネルを抜けたアリさんたちの前に、灰色で真四角な、天までそびえる大きな大きな壁。

それは小さな庭を囲む、コンクリートの塀だったのですが、そんなことはアリさんたちにはわかりません。

「ここが、草原の果てかあ。あまり素敵なところではありませんね……」

呟くアリさんの声に、いつもの元気はありません。

どこまでも直線で、薄汚れた固くて冷たい壁は、青々とした生命にあふれた草花や生き物たちに比べて、あまり美しくないものであるように見えました。

一生懸命歩いてきて、やっとたどり着いた草原の果てに、とても美しく素晴らしい場所を想像していたアリさんは、ちょっと拍子抜けしてしまっていたのでした。

「そんなことはないよ。ここはとても、素敵なところなのさ」

アオムシが、さもうれしそうにからだを震わせます。

「でも、ここには優しい葉っぱも、かわいらしい虫も、きれいなしずくもありませんよ？」

困ったようにアリさんが言うと、アオムシがミドリのからだを伸ばして、上を差します。

「ほら、見てごらんよ」

「上、ですか？……わあ」

うながされるままに空を見上げたアリさんは、歓声を上げました。

そこには、黄色や紫や白の、色とりどりのチヨウチヨがその美しい羽根を広げて優雅に舞っていました。

その数は、十を軽く越えていて、そこはまるで、チヨウチヨの楽園のようでした。

ひらひら、ひらひらと優雅に舞うチヨウチヨたちが、驚いたように青空を見上げているアリさんとアオムシの周りに集まってきました。

「あらあら、あなたはタンポポ畑のアリさんね。こんなところまで来て、どうしたの？」

黄色と黒の、透き通った見事な羽根のチヨウチヨが、鈴が鳴るような可愛らしい声でアリさんにたずねました。

アリさんたちがやつのことであどりに着いた草原の果てまでの道のりは、彼女たちにとってはお散歩のコースなのでした。

でも、もうアリさんは落ち込んだりしません。チヨウチヨたちには見えないものがあるとするれば、アリさんたちには見えない素敵なものだっけとあるのですから。

「僕は、いろいろなものを見るためにタンポポ畑からここまで歩いてきたんです。今までに見たこともない、素敵なものに、たくさん出会うことができましたよ」

ちよっと誇らしげに、アリさんが胸を張ります。

チヨウチヨはくすくすと、そよ風のようにかすかに笑って、美しい羽根を小さく震わせました。

キラキラ、キラキラとお日様の光を反射して黄金色に輝く粉が、彼女の羽から無数に舞い散って、それはそれはきれいでした。

「素敵な旅をしてきたのね。そちらの方も一緒に？」

「は、はいっ！」

優雅な声でチヨウチヨが尋ねると、アオムシはちよっとだけ赤くなりながら、急いで答えました。

「うふふ、かわいらしいお嬢さんね」

チヨウチヨはまた、そよ風のように笑います。

アリさんは、驚いたようにアオムシの方を見ました。

「アオムシさん、あなたは女の子だったんですね？」

アオムシはちよつと恥ずかしそうに、はにかみながらうなずきました。

そして、憧れのこもったきらきらした瞳でチヨウチヨたちを見つめ、それからふと思いついたようにちよつとだけさびしそうな顔になりました。

アオムシはそのすきとおった若葉色をしたからだを伸ばして、アリさんの方に向き直りました。

「アリさん、ボクは君とお別れしなきゃならないんだ」

「お別れ、ですか？」

驚いたように、アリさんが聞き返します。

アオムシは、ゆっくりと全身でうなずきました。

「ボクはね……ここで、チヨウチヨになるんだ」

アオムシがはにかんだ笑顔を浮かべながらつぶやいた言葉に、アリさんが目を丸くします。

「チヨウチヨに？ アオムシさんは、あのキラキラしたきれいなチヨウチヨに、なるのですか？」

アリさんは、はあく、とため息をついて空を見上げました。そこには今も、色とりどりの鮮やかなチヨウチヨたちがひらひらと、青色の中を漂っております。

「……だけど」

アリさんの声がちよつとだけ弱弱しく、小さくなります。

「お別れ、しなくてはいけないんですね……。ずっと一緒にいられるような、そんな風に僕、思ってしまった」

言いながらアリさんは、だんだんとうつぶむいてしまいます。

「……ねえ、アリさん。君はこれからどうするんだい？」

アオムシが少しだけ声を裏返ししながらアリさんに尋ねます。その声にアリさんは、わずかに顔を上げました。

「これから？ ええっと……」

アリさんは少しだけ考え込んで、

「僕は、もといた所に帰りますよ。家族や仲間たちが、待っていますから」

と答えました。それは消え入りそうな小さな声でしたが、話すうちにアリさんは自分の言葉にはつとしたように顔を上げます。

「そうだ、僕は仲間たちに、この旅のことをたくさん話してあげてあげた。見たこともないものにたくさん出会ったことや、いつも気づかなかったことに気づけたことや、それに……アオムシさんのことを。ふるさとで待っている仲間たちに、たくさんたくさん、教えてあげるんです」

アリさんは胸の中に浮かんだ思いを急いでアオムシに伝えたくて、少し早口になって言いました。その声はもう、消え入りそうなものではありません。

「それは、とても素敵なことだね」

アオムシはうれしそうに、静かにうなずきます。

「ねえ、アリさん。ボクはここで君とお別れすることになるけど、どうか悲しまないで。これからボクはボクにしか見れないものを見ていくし、君は君にしか見えないものを見ていくんだよ。それで、たくさん時間はかかるかもしれないけれど、ボクがいつか、キラキラしたきれいなチョウチョになることができたなら、ボクは君の住むところへ、飛んでいくから」

そう言って、アオムシはアリさんの目をまっすぐに見つめました。

アリさんも、アオムシの透き通った目を、黙って見つめます。

ふたりは同時に、静かに微笑みました。

『その時に、また』

それからふたりは、くるりとお互いに背を向けて歩き出しました。それぞれの道に向かって。

空を見上げれば、ふたりの新しい旅立ちを祝福するように、チョ

かけっこが得意なアリさん

ウチヨたちがひらひらと優雅に舞い、優しい太陽の光がさらさら、さらさらとふりそそいでいました。

草原の果てに（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

かけっこが得意なアリさん

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514a/>

かけっこが得意なアリさん

2008年11月7日08時20分発行